

桜井厚先生の定年退職にあたって

桜井厚先生は、2013年3月に定年を迎えられ、立教大学社会学部を退職されました。先生は2006年4月に千葉大学から立教大学社会学部に着任され、社会学科に所属されました。在職年数は7年と短い期間でしたが、2009・10年度に社会学研究科社会学専攻前期課程主任を務められるなど、本学部・研究科における研究・教育・運営のすべてにわたって尽力されました。

桜井先生は大阪大学工学部を卒業し、技術系の企業に就職されましたが、社会に対する強い疑問からその職を辞して、社会学を専攻するために東京教育大学に入学されました。そこで生活史研究の第一人者である中野卓教授と出会い、後に「ライフストーリー研究」として結実する研究をスタートさせることとなります。先生の研究関心は、被差別部落、環境問題、ジェンダー・家族、戦争の記憶など多岐にわたりますが、社会に生きる人々の「人生」の語りを聞きとる、という方法を一貫してとっておられます。本学部着任後も、『戦後世相の経験史』（編著、2006年）、『過去を忘れない——語り継ぐ経験の社会学』（共編著、2008年）、『差別の境界をゆく——生活世界のエスノグラフィー』（共著、2012年）、『ライフストーリー論』（単著、2012年）を相次いで上梓され、精力的に研究を進められました。

先生は学部教育でも尽力され、「社会問題の社会学」の講義で学生の問題意識を揺さぶるとともに、学生がさまざまな人に会ってライフストーリーを記録する桜井ゼミは毎年多くの学生たちを惹きつけてきました。大学院では、質的調査法の授業で院生の研究能力の向上に貢献され、マイノリティ研究をテーマとする院生たちを熱心に指導してこられました。また、2012年度には、ゼミ生・院生とともに東日本大震災の被災地である岩手県陸前高田市および大槌町を訪れ、現地の人々と学生が共同で作業したあと関係ができた人からライフストーリーを聞く調査プロジェクトを開始されました。これは、2013年度から「震災のフィールドワーク」という学部科目、2014年度から「震災経験のライフストーリー」という大学院プロジェクト科目となり、ご退職後も兼任講師として引き続き担当されています。

私は前任校の千葉大学で同僚で、研究分野が近いこともあり先生と多くの機会をご一緒しましたが、私の先生への印象は、通常は容易に越えられない「境界」を軽々と越える人、というものです。先生の採用人事のさい私は社会学科長・人事委員長として、選考結果（教授会構成員がその分野で最適の候補を推薦し、ご本人に知らせずに選考する方式でした）をお伝えするため御茶ノ水駅近くの喫茶店で待ち合わせ、ふらっと現われた先生に異動の可能性を唐突にお伺いしたのですが、3日後にはさらりとご受諾のメールをくださいました。ご着任後、ゲスト・スピーカーとして屠場の方々に講義に招く回があると知り、聴講していいですかと私が伺うと、どうぞどうぞとこだわりなく許してくださいました。また、被災地にご一緒したときも、現地の人々のなかに自然にすっとはいって行く先生の姿には驚かされました。社会に存在するさまざまな境界をしなやかに越える先生の姿勢は、学問にも生き方にも貫かれているように思います。

おそらく桜井先生は、年齢という境界も軽々と越えて今後も研究や教育を続けていかれるのでしょう。先生がご健康に留意され、ますますご活躍されることを心よりお祈りいたします。

2014年3月

社会学部長

奥村 隆

